

5月22日

在シドニー総領事交流録 第13回

ポール・グリーン神父ご逝去

以前、交流録(第9回)でご紹介した、日豪和解に一生を捧げられたポール・グリーン神父が、本年1月23日夜に永眠されました。享年97歳でした。

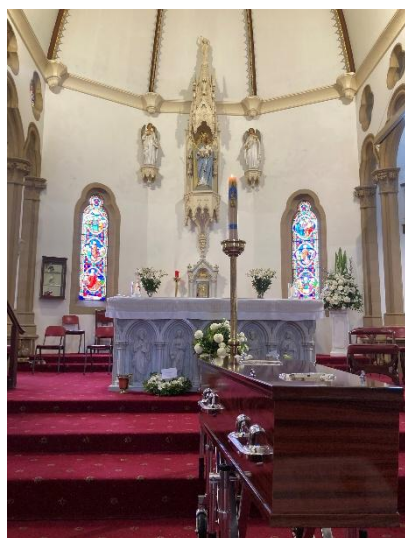
ご葬儀のミサは2月2日にシドニー郊外のハンターヒルにある聖マリア教会で執り行われ、私も参列して参りました。

賛美歌が流れる厳粛な雰囲気の中、Gavin Foster 地区指導神父のご挨拶で葬儀が始まりました。その後、ポール・グリーン神父が眠る棺にご親族、マリスタ教会関係者の方々がお別れを告げた後、同神父のご遺志で仏教式ご焼香が取り入れられ、私もお焼香を差し上げました。



ポール・グリーン神父と(2024年12月)

その後、ポール・グリーン神父の姪のアイリーンさんが弔辞を読まれました。故人が人と会うのが大好きで、多くの友情を育むと同時に、ユーモアに富み、長年独房に投獄されているテロリストに面会した際に、冗談を交え、心を開かせたエピソードなどが紹介されました。そして何よりも、物語を語るのが大好きで、実在した人々の生涯について9冊も執筆したことも紹介されました。そうして育まれた友情の中には、シドニーの日本人コミュニティとの関係もあり、日本人聖歌隊による讃美歌が披露されたのも印象的でした。



ご葬儀の最後に、参列者が棺をお見送りしました。その後、別室に移動し、故人のことを懐

かしみました。私はそこでアイリーンさんとゆっくりお話することができ、堀井巖外務副大臣、鈴木量博在豪日本大使及び堀内大造大和高田市市長から、ご遺族への弔辞をお伝えして、篤い御礼を頂きました。ポール・グリーン神父は1956年に大和高田市にある高田カトリック教会に赴任され、そちらで長く活動をされました。同神父の大和高田市での活躍が堀内市長の弔辞の中でよくまとめられておりますので、同弔辞の一部をここでご紹介します。

「神父様と本市との歩みは、一九五六年に高田カトリック教会へ赴任されたことから始まりました。当時、戦争の傷跡がまだ癒えぬ時代にあって、神父様は日豪両国で募金活動に奔走され、本市に「高田カトリック幼稚園」を設立してくださいました。この幼稚園こそが、両国の心を結ぶ最初の大きな一歩となりました。

そして一九六三年八月七日、神父様の導きにより、大和高田市とリズモア市との間で「日豪姉妹都市提携第1号」という歴史的な盟約が結ばれました。広島への原子爆弾投下の翌日である八月七日という日付には、悲しい過去を乗り越え、平和を誓うという神父様の強い願いが込められていました。盟約書に刻まれた「この友情が全世界の平和に貢献する」という高い理想は、今や日豪間に百を超える姉妹都市の輪として、大きく広がっております。

文筆活動を通じて、永井隆博士の生涯を描いた『長崎の歌』などにより、日本の精神や文化を世界へ発信し、相互理解の促進に尽力されました。これらの多大なるご功績に対し、日本政府から旭日章、またオーストラリア政府からオーストラリア勲章が授与されたことは、両国における神父様への深い敬愛の証であります。」

大和高田市とリズモア市との姉妹都市関係は今日まで脈々と続いており、リズモア市で毎年6月の冬至の頃に行われるランタン祭りに大和高田市のマスコットである「みくちゃん」のランタンが行進することは、以前の交流録（第7回）でご紹介したとおりです。



ポール・グリーン神父の姪アイリーンさんと

このミサの約1か月後の3月11日に、聖マリア教会の墓地でポール・グリーン神父の遺灰の埋葬式が行われ、私も参列し、献花しました。奈良市の登美ヶ丘教会でも追悼ミサが行われ、遺灰の一部は御所市にある兄のトニー・グリーン神父のお墓の隣に埋葬されました。



このご葬儀と埋葬式でお会いした故人の同僚神父の方から、ポール・グリーン神父の自叙記を頂きました。ポール・グリーン神父は、兄トニー・グリーン神父をはじめ、様々な方々について著作にまとめられながら、ご自身については著作がないと思っていたので、大変参考になりました。その自叙記の中で、ポール・グリーン神父と日本との最初の接点が興味深く語られていますので、ここにご紹介します。それは、同神父が、生まれ故郷リズモアから離れてシドニー郊外ハンターヒルにある聖ジョセフ・カレッジに寄宿していた12歳の時の話です。時は1941年であり、カレッジの修道士から生徒たちに対し、日本軍がシンガポールに侵攻してくるかもしれないが、英本国が強力な戦艦2隻を派遣するので、心配ないと話すのですが、その直後、その2隻が撃沈されたという知らせが豪州に届きます。同神父のお父様は、日本軍がシドニーを爆撃して橋が壊されたら、リズモアから車で救いに行けないとして、その翌年、兄のトニー・グリーン神父と共に、リズモアにあるカトリックのウッドローン・カレッジに転校させます。

この話を興味深いと思った理由の一つとして、同カレッジ出身のマーズデン神父の存在があります。マーズデン神父は第二次大戦中に日本軍の捕虜となり、泰緬鉄道建設で従軍司祭となりました。日本への憎悪を抱く豪州軍人に接する中で、戦後は日本との和解が必要であると信じ、終戦直後に同カレッジを訪れました。このとき、グリーン兄弟が同神父の取組に感銘を受け、その後、それぞれ神父となり、1953年と1955年に訪日することになりましたが、いわばこの転校がそのきっかけをもたらしたと言えます。

ポール・グリーン神父は、併せて20年以上にわたり日本に住み、日豪の和解に尽力されるとともに、日本の言語や文化を深く学ばれました。こうした功績により、日本政府から旭日小綬章、オーストラリア政府からオーストラリア勲章(OAM)を授与されたほか、2010年には、

「トニー・グリーン神父日豪センター」があるサザンクロス大学から名誉博士号を贈られました。

この4月のANZACデー前日の日没に、私はシドニー・オペラハウス前で行われた Sunset Tribute 2026 に招待されました。ビーズリーNSW州総督、マールズ副首相兼国防大臣、モリソン前首相なども参列した盛大な式典で、私も日本を代表する形で献花を行いました。戦後の和解の証として、日本総領事の出席が式典で紹介されたのは、ポール・グリーン神父をはじめとする方々の長年のご努力の賜物であると、強く感じた次第です。



71 年間にわたる司祭生活の中で、日豪両国の和解と友好に生涯を捧げられたポール・グリーン神父に、改めて深い敬意と感謝の思いを表し、謹んで哀悼の意を捧げたいと思います。

(了)